多読授業受講者のナラティヴを探究する

深谷　素子

1. 研究の背景と目的

ここ数年、英語参考書業界に精読ブームが沸き起こる中、多読の旗色が悪い。例えば直木賞作家の小川哲氏は、朝日新聞デジタルのコラム「好書好日」の中で、自らの受験時代を振り返り「当時、受験生の間では英文の『多読』や『速読』が流行っていたが、僕はその二つの言葉が大嫌いだった（今でも嫌いだ）。日本語の本でも同じことが言えるが、正確に読むことのできない人間がどれだけ多読や速読をしても、誤読の数が増えるだけだ」と述べている（「小川哲さんが作家として同意する『英文解釈教室』の考え方」, 2021）。この発言は、多読に対するよくある誤解を浮き彫りにしている。多読と速読はセットではないし、多読学習には専門知識を持った指導者、大量の多読用書籍、読書コミュニティの 3 点セットが必須である。さらに多読の効果は、「たくさん読めば英語力が向上する」といった直線的な表れ方をしない。そこには affect への肯定的効果が介在する(小林 et al., 2010; 西澤 et al., 2011; 高瀬, 2007)。多読の強みは、英語読書への意識・態度の肯定的変化にあると考えられるのだ。

そこで本研究では、多読授業受講者のナラティヴ分析を試みた。多読授業において学習者がどのように読書をしているのか、彼らに何が起こっているのかを量的データだけでなく、質的データ、つまり多読授業受講者の「語る言葉＝ナラティヴ」から明らかにすることで、上記の誤解を少しでも解消するのが本研究の目的である。

2. 研究の方法

調査対象者は、私立大学法学部 2 年生 42 名。英語力は中・上級レベル、対象授業は「Active Reading : 英語で多読、濫読、味読」と題した選択必修英語科目（通年）である。受講者はシラバスを読んで履修するため、比較的読書好きな学生が集まったと推測される。授業内多読を基本活動とし、まず辞書なしで読める平易な graded readers から読み始め、最終的にネイティヴ向けの洋書を読めるようになることを目指した。読む本は各自自由に選んでよい（教員が適宜選書アドバイスを行う）、読書量や読む本の難易度は成績評価に加味しない（成績は授業参加度と期末ブックレポートで評価）と授業開始時に明言した。また、自律的読書を促すため、選書の足場かけになるような活動（Book Talk や Bibliobattle）を盛り込んだ。特に秋学期は、読書の量から質へのシフトを推奨し、文学作品（J. D. Salinger の“A Perfect Day for Bananafish”）の精読とそれを題材としたワールドカフェ、POP（書店で宣伝用に使われる葉書サイズの書籍紹介カード）作成等によって深く読む体験を促した。

調査は、量的・質的両面から行った。まず、事前事後アンケート（リカートスケール 5 段階評価）にて、英語学習、多読、読書についての設問 15 問に回答させ、値の変化を見た。次に、春学期 14 回、秋学期 14 回の各授業後に受講者に書かせた自由コメント（読んだ本の感想や読書状況、読みたい本のリクエストや質問などを書かせ、教員から返信する）について、定性的コーディング（オープンコーディング）を行った。佐藤 (2009)によれば、「文書ドキュメントの 1 行 1 行を丹念に読みながら、思いつくままにどんどんコードを書き込んでいく」オープンコーディングは、「ここでは何が起きているのか？/その出来事は、どのような理由や原因によって起きているのか？/この人はどういう事を言っているのか？/発言や行為の背景には、どのような意図があるのだろうか？」といった問いに有効であるという(pp. 97-98)。そこで、合計 1176 件のコメントにオープンコーディングを施し、コードを抽出することとした。

3. 結果

3.1 量的データ

まず、事前事後アンケートの結果を見たい。t 検定は行っていないので統計的にどこまで意味があるかは不明である。設問 2, 4, 15 を見ると、多読授業後、受講者が英語力（スピード、直読直解、理解度）の多少の向上を感じていることがわかる。より注目すべきは、太字にした設問 7〜12 である。設問 8, 9, 11 は自律的読書の促進、設問 7, 10, 12 は読書の楽しさ、読書を通しての学びが増進したことを示唆している。特に設問 9, 10, 12 は 2 ポイント近い伸びを示しており、多読授業が英語読書への意識・態度に肯定的影響を与えたことが推測される。

表 1 ：事前事後アンケートの回答の比較　(N=42)

設問	事前(M)	事後(M)	差

1	英語が好きだ	3.50	3.60	0.10
2	英語をスラスラ読むことができる	2.48	3.02	0.55
3	英語を読むのは楽しい	3.38	3.67	0.29
4	英語を読むとき、日本語に訳さずに読むことができる	2.60	3.21	0.61
5	英語を読むのが苦手だ	3.21	2.86	-0.35
6	英語の本を読みたい	4.12	3.67	-0.44
7	**英語の本を読んで面白いと思ったことがある**	**3.36**	**4.47**	**1.11**
8	**自分の英語力にあった英語の本を選ぶことができる**	**2.76**	**3.77**	**1.01**
9	**英語で本を読む習慣がある**	**1.38**	**3.19**	**1.81**
10	**忘れられない英語の本がある**	**1.69**	**3.63**	**1.94**
11	**自分の好みにあった英語の本を選ぶことができる**	**3.05**	**4.14**	**1.09**
12	**英語の本を読んで深く考えたことがある**	**2.24**	**4.09**	**1.85**
13	英語を見ると憂うつになる	2.10	2.12	0.02
14	内容が面白ければ英語の本でも読むのが苦にならない	3.76	4.00	0.24
15	英語の本を読んでいて、理解できているかどうかが分かる	3.38	3.86	0.48

3.2 質的データ

質的データは２つの方法で分析した。まず、1176 件の授業コメントにオープンコーディングを行い、以下の８つのコードを抽出した。

1. 優等生的決意表明

「先週はほぼ読めなかったので今週は頑張ります」「夏休みも頑張ってたくさん読みたいです」など、一見読書意欲を示しているようだが、コメントが定型化していることから教師に読まれることを意識して「優等生的」に振る舞っていると考えられるコメント群。実際の意識変化を見るには、このタイプは除外して考える必要がある。

2. アクティビティへの反応

「初めはかなり緊張しましたが、良い雰囲気の中で Bibliobattle が行えたので良かったです」など、読書アクティビティに対する感想コメント群。アクティビティを実施した週はこのタイプのコメントがほとんどだった。

3. 英語力に関する記述

「ここから英語の本を読むことでどのくらい英語力が上がるのか楽しみです」のように、「英語力」という言葉が含まれたコメント群。授業開始直後の 4 月（決意表明の時期）と、1 月の最終授業時（総括の時期）に集中的に現れた。多読によって英語力が向上したかどうかは受講者によって認識が異なることがわかった。

4. 本に関する記述（感想、選書、レベル・ジャンル調整）

読んだ本や読む予定の本に関する報告コメント群で、圧倒的にコメント数が多かった。「マジックツリーハウスシリーズと *A Walk To Remember* を並行して読んでいこうと考えています」「*Dawson's Creek* は内容がアメリカの青春ドラマのような感じで、読みやすく完全に娯楽として読むことができ、もう読み終わってしまったという感覚で進めることができた」「*The Gift of the Magi* は本当に単語が難しくてなかなか読み進められずつらいです」など。特に目立ったのが、本のレベル・ジャンルの調整に関するコメントで、「段々と読書がマンネリしている感じがあったので、少しレベルを下げて読むことでスラスラと楽しく読書ができた」「学園祭前で忙しくて部屋が汚くなってきたのでコンマリさんの本を選んだ」など、受講者が自律的な選書を促されている様子が観察された。

5. 多読・読書に関する気づき

「今はマジックツリーハウスシリーズを読んでいます。以前より一冊を短く感じるようになった気がします」「数か月間毎週英文を読んだことで、自然と無意識のうちに英語を英語のまま理解できるようになった」など、多読による自分の変化、読書に対する意識変化を示すコメント群。

6. 苦手意識の軽減

「本当に少しずつ、出来るところからで良いんだということを実感できました」「授業時間内に 5000 語を超えるマクベスを読むことができた。自信がついた」「最近コンスタントに英語を読むことが苦でなくなってきた」など、多くの先行研究でも強調される affect への肯定的効果が見られた。

7. 読書が楽しい、面白い

「マジックツリーハウスを読んでいますが、昔大好きだったシリーズなので全部読みたいぐらい楽しいです」「*Tokyo Ueno Station* を読んだ。日本のお見合いや輪廻転生について英語で説明されているのが面白い」など。

自分で選んだ本が面白いということは、レベルやジャンルが適していることを意味し、受講者の自律的読書態度が生んだ楽しさであると理解できる。

8.　不安感

「不安・心配」という言葉は 25 例あった。「英語の本を読んだことがないため正直不安もあります」といった多読に対する不安コメントは 4 月初めに集中している。その後は「最終授業が近づき目標語数を達成できるのか少し心配」「40 万語行けるか心配だが、どうにかしていきたい」など自ら設定した目標に関する不安が見られた。

次に、抽出した 8 つのコードを意識しつつ、授業の回数を縦軸として、それぞれの回の 42 名の受講者のコメントを横に読み、改めてコーディングした結果、以下のような概念的カテゴリーが抽出された。自由に本を選んで読むという多読授業の枠組みに放り込まれた受講者の意識が、英語力向上へのプレッシャーから離れ自分が読める本、読みたい本の探求に向かった結果、英語での読書を楽しむに至ったことが読み取れる。これは 3.1 の量的データの分析結果とも符号する。

図 1：抽出された概念的カテゴリー

春学期	秋学期
簡単な本を読むことによる武装解除 何を読むか自分で試行錯誤する 読みたい本と読める本のせめぎ合い 両者が合致したときの達成感・快感 アクティビティが選書を促し、自律的読書へ 英語力向上への言及が減る	読書アクティビティが読書への気づきを促す 文学作品を読む（繰り返し読む、深く読む、他者と議論して読む）意義の確認 自分で読みたい本を探す、買う 英語への抵抗感の軽減 読書を楽しむ姿勢

4. まとめと課題

以上の量的・質的データ分析の結果は、受講者のひとりが「これから多読授業を受講する後輩へのアドバイス」として書いた、以下のコメントに端的にまとめられていると言えるだろう。

> この授業は自主的に本を読み進めていく必要があります。なので基本的には日本語でも英語でも本を読むという習慣が元からついている人にお勧めします。だからと言って実際に今その習慣がたとえない人でも、この授業を通してそれを身につけることはできると思います。実際私自身本を読む習慣があるわけでもなく、英語が特段得意というわけでもない状態でこの授業を受講しました。最初は英語を多読するという以前にどの本を読むべきかも分からず戸惑っていました。しかしながら先生や他のクラスメートのアドバイスを参考にしながら本を読み進めていくうちにそのような悩みは徐々に抱えることなく、秋学期に入ってからは自主的に読みたい本を探すようになり、英語を読むこと自体も苦にならなくなりました。だから今から多読していくことに不安を抱える人であっても語数が本当に少ない本でもいいので英語の本を読むという習慣を身につけることが一番重要だと思います。

この受講者のナラティヴが示しているのは、多読授業の要諦は、英語力向上以前に自律的読書への目覚めと読書習慣の確立にあるということではないか。冒頭紹介した小川氏が見落としていたのはこの点にほかならない。

今後の課題として、受講者数名を抽出し半構造化インタビューを実施する予定である。多読授業受講者に「何が起こっているのか」、その肯定的側面ならびに否定的側面をも含めて、詳細な調査を継続したい。

参考文献

小林めぐみ・河内智子・深谷素子・佐藤明可・谷牧子（成蹊大学国際教育センター多読共同研究プロジェクトグループ）（編著）(2010)『多読ではぐくむ英語力プラス α』 成美堂

西澤一・吉岡貴芳・伊藤和晃・長岡美晴・弘山貞夫・浅井晴美 (2011)「英語多読が効果を上げるしくみと多読授業の成否要因に関する一考察」『工学教育』59(4), 66-71.

「小川哲さんが作家として同意する『英文解釈教室』の考え方」(2021, August 17) 『朝日新聞デジタル』

佐藤郁哉 (2008)『質的データ分析法』新曜社

高瀬敦子 (2007) 「大学生の効果的多読指導法 ―易しい多読用教材と授業内読書の効果―」『関西大学外国語教育フォーラム』6, 1-13